



《 クリスマスに寄せて 》 「賢者の贈り物」 原作：オー・ヘンリー (O. Henry)

12月24日の「クリスマス・イヴ」。アメリカにヤングという若い夫婦がいました。夫の名はジェイムズ、妻は彼のことをジムと呼んでいました。妻の名はデラ。ジムは貧しいサラリーマンでした。しかも、ヤング夫妻が迎えたその年は特別に景気が悪く、給料も減ってしまいました。二人はいつもより厳しいクリスマスを迎えなければなりません。それでもデラは、このクリスマス・イヴを、何とか楽しく過ごしたいと思っていました。そして愛する夫のために何かすばらしいプレゼントを買いたいと思いましたが、1ドル87セントしかありません。何度数え直しても、1ドル87セント。これでは何も買えません。デラが目から涙が出て来ました。しかし、デラが姿見の前に立ちお化粧を直していたとき、すばらしいことを思いつきました。デラには膝の下までとどく美しい髪の毛があったのです。すぐにその長い髪の毛はある品物に変っていました。それは、ジムが大切にしている金の懐中時計に付ける「プラチナの鎖」でした。一方、ジムも愛する妻デラのために何かすばらしいプレゼントをしようと考えていました。でも、お金がありません。ジムは、祖父と父から受け継いだ大切な金の懐中時計を質に入れ、デラが欲しがっていた「鼈甲の櫛」を買いました。



デラは、ジムにプレゼントする「プラチナの時計鎖」を用意し、ジムの帰りを待っていました。ジムは定刻通りにアパートに帰って来ました。しかし、扉を開いたジムは、デラの顔を見て驚きました。デラのあの美しい髪の毛が無くなっていました。でも、それだけではありません。髪の毛を売って買った「プラチナの鎖」をつけるはずのジムの金時計も無くなっていました。ジムが金時計を売って、デラの髪に飾ろうとした「鼈甲の櫛」。デラが自分の髪を売って買った「プラチナの鎖」。どちらもムダになってしまいました。デラの美しい髪の毛はなく、ジムの金時計もないからです。しかし、彼らはお互いの「思いやり」を受け取りました。自分の一番大切にしていたものを犠牲にしてまで、愛する者を喜ばせようとした、その「思いやりの心」を互いに受け取ったのです。彼らはその二つのプレゼントを机の引き出しにそっとしまったということです。

作者のオー・ヘンリーは最後にこう言っている。「現代の賢者たちに言おう。贈りものをする人々の中で、この二人こそ『賢い人々』であったのだと……。贈りものを与え、贈りものを受けとる人々のなかで、彼ら二人のごとき者こそが『最も賢き人々』であるのだと……」。

「クリスマス・イヴ」を相手と幸せに過ごしたという思いから、自分の大切なものを失ってでも相手のために贈り物を買った主人公二人の行動と、その気持ちを考えることを通して、人を思いやり、人のために行動することが尊いものであることに気付き、相手を思いやる行動を取りながら、人生を歩んでいきたいという道徳的心情を高める。